「悲憤詩」小考 ― 研究史とその問題点 ―

福　山　泰　男
（文化システム専攻アジア文化領域担当）

一

『後漢書』列女伝・董祀妻伝すなわち蔡琰（字は文姫）の伝に、「悲憤詩」と称される詩二首が収められている。蔡琰は、後漢を代表する学者蔡邕の娘であるとともに、後漢末の混乱の中で数奇な経歴を残した女性としてもよく知られている。「悲憤詩」には，その劇的な人生の一端が詠まれているが，作者については古来様々な論議があった。

「悲憤詩」二首以外に蔡琰作と伝えられる作品に，「胡笳十八拍」がある。しかし，「胡笳十八拍」は，北宋末・郭茂倩の『楽府詩集』に初めて登場する作品であり，范曄の『後漢書』所収「悲憤詩」とはテクストの性質を異にしている。したがって両作品に対する考察方法・手順は，自ずと違ってくるであろう。テクストとしての「悲憤詩」と「胡笳十八拍」は，一応切り離して考えておきたい。「胡笳十八拍」については，作品の真偽をめぐり，1959年，中国において「胡笳十八拍」論争が大きく繰り広げられた。その中には，「悲憤詩」に関連する重要な考察も展開されている。それらも含め，「悲憤詩」はこれまで少なからず論究されてきたが，それぞれ論点・解釈・評価・批評方法等にゆれがある。

なおかつ，「悲憤詩」をどう文学史に位置づけるか，『後漢書』列女伝に収載された歴史・思想的意義，あるいは作品に内在する女性性の問題等[1]，課題は多々残されている。 そのような新たな課題を果たすために，「悲憤詩」に対する従来の多様な理解をひとまずは通覧しておく必要があろう。以下，「悲憤詩」の研究史とその問題点について私見をまじえつつ述べてみたい。

二

はじめに，『後漢書』董祀妻伝⑵の全文を掲げておきたい。

陳留董祀妻者，同郡蔡邕之女也，名琰，字文姫。博學有才辯，又妙於音律。適河東衞仲道，夫亡無子，歸寧于家。

興平中，天下喪亂，文姫爲胡騎所獲，沒於南匈奴左賢王。在胡中十二年，生二子。曹操素與邕善，痛其無嗣，乃遣使者以金璧贖之，而重嫁於祀。

祀爲屯田都尉，犯法當死，文姫詣曹操請之。時公卿名士及遠方使驛坐者滿堂。操謂賓客曰，「蔡伯喈女在外，今爲諸君見之。」及文姫進，蓬首徒行，叩頭請罪，音辭淸辯，旨甚酸哀。衆皆爲改容。操曰，「誠實相矜，然文狀已去，柰何。」文姫曰，「明公廐馬萬匹，虎士成林，何惜疾足一騎，而不濟垂死之命乎。」操感其言，乃追原祀罪。時且寒，賜以頭巾履襪。

操因問曰，「聞夫人家，先多墳籍，猶能憶識之不。」文姫曰，「昔亡父賜書四千許卷，流離塗炭，罔有存者，今所誦憶，裁四百餘篇耳。」操曰，「今當使十吏就夫人寫之。」文姫曰，「妾聞男女之別，禮不親授，乞給紙筆，眞草唯命。」於是繕書送之，文無遺誤。

後感傷亂離，追懷悲憤，作詩二章，其辭曰，

漢季失權柄，董卓亂天常，志欲圖篡弑，先害諸賢良。逼迫遷舊邦，擁主以自彊。海内興義師，欲共討不祥。卓衆來東下，金甲耀日光。平土人脆弱，來兵皆胡羌，獵野圍城邑，所向悉破亡。斬截無孑遺，尸骸相撑拒，馬邊縣男頭，馬後載婦女。長驅西入關，迴路險且阻．還顧邈冥冥，肝

脾爲爛腐。所略有萬計，不得令屯聚．或有骨肉俱，欲言不敢語。失意機微閒，輒言斃降虜，要當以亭刃，我曹不活汝，豈復惜性命，不堪其詈罵，或便加棰杖，毒痛參并下。旦則號泣行，夜則悲吟坐, 欲死不能得, 欲生無一可。彼蒼者何辜, 乃遭此戹禍。

邊荒與華異，人俗少義理，處所多霜雪，胡風春夏起, 翩翩吹我衣, 肅肅入我耳。感時念父母, 哀歎無窮已。有客從外來，聞之常歡喜，迎問其消息，輒復非鄉里。邂逅徼時願，骨肉來迎己，己得自解免，當復棄兒子。天屬綴人心，念別無會期，存亡永乖隔，不忍與之辭。兒前抱我頸，問母欲何之。人言母當去，豈復有還時。阿母常仁惻，今何更不慈。我尚未成人，柰何不顧思。見此崩五内，恍惚生狂癡，號泣手撫摩，當發復回疑。兼有同時輩，相送告離別，慕我獨得歸，哀叫聲摧裂，馬爲立踟躕，車爲不轉轍。觀者皆歔欷，行路亦嗚咽。去去割情戀，遄征日遐邁，悠悠三千里，何時復交會，念我出腹子，匈臆爲摧敗。

既至家人盡，又復無中外，城郭爲山林，庭宇生荊艾。白骨不知誰, 從横莫覆蓋。出門無人聲, 豺狼號且吠。煢煢對孤景，怛咤糜肝肺。登高遠眺望，魂神忽飛逝，奄若壽命盡，旁人相寬大，爲復彊視息，雖生何聊賴。託命於新人，竭心自勗厲。流離成鄙賤，常恐復捐廢。人生幾何時，懷憂終年歳。

其二章曰，

嗟薄祜兮遭世患，宗族殄兮門户單，身執略兮入西關，歴險阻兮之羌蠻。山谷眇兮路曼曼，眷東顧兮但悲歎。冥當寢兮不能安，飢當食兮不能餐，常流涕兮眥不乾。薄志節兮念死難，雖苟活兮無形顔。

惟彼方兮遠陽　，陰氣凝兮雪夏零，沙漠壅兮塵冥冥，有草木兮春不榮。人似禽兮食臭腥，言兜離兮狀窈停。歳聿暮兮時邁征，夜悠長兮禁門扃，不能寐兮起屏營。登胡殿兮臨廣庭。玄雲合兮翳月星，北風　兮肅泠泠，胡笳動兮邊馬鳴，孤雁歸兮聲嚶嚶。樂人興兮彈琴箏，音相和兮悲且淸。心吐思兮匈憤盈，欲舒氣兮恐彼驚，含哀咽兮涕沾頸。

家既迎兮當歸寧，臨長路兮捐所生。兒呼母兮號失聲，我掩耳兮不忍聽。追持我兮走煢煢，頓復起兮毀顔形。還顧之兮破人情，心怛絶兮死復生。

陳留の董祀の妻は，同郡の蔡邕の女なり。名は琰，字は文姫。博學にして才辯有り。又，音律に妙なり。河東の衞仲道に適くも，夫亡くて子無し。家に歸寧す。興平中に天下喪亂す。文姫胡騎の獲うる所と爲り，南匈奴の左賢王に沒す。胡中に在ること十二年にして，二子を生めり。曹操素より邕と善し。其の嗣の無きを痛み，使者を遣わして金璧を以て之を贖い，重ねて祀に嫁がしむ。

祀，屯田の都尉と為り，法を犯して當に死すべし。文姫曹操に詣りて之を請う。時に公卿名士及び遠方の使驛，坐する者堂に滿ちたり。操賓客に謂いて曰く,「蔡伯喈の女外に在り。今諸君の爲に之を見さしむ」と。文姫進むに及びて，蓬首にて徒行し，叩頭して罪を請う。音辭清辯なり，旨甚だ酸哀なり。衆皆，爲に容を改む。操曰く,「誠に實ならば相矜しまん。然れども文状已に去りぬ，柰何」と。文姫曰く,「明公が廐には馬萬匹あり，虎士林を成せり。何ぞ疾足の一騎を惜しみて，死に垂なんとする命を濟わざらんや」と。操其の言に感じて，乃ち追いて祀が罪を原す。時に且に寒からんとし，賜うに頭巾覆襪を以てす。操因りて問いて曰く,「夫人が家，先に墳籍多しと聞く，猶能く之を憶識するやいなや」と。文姫曰く,「昔，亡父より書四千許巻を賜わるも，流離塗炭して存する有る者罕し。今, 誦憶する所は裁かに四百餘篇のみ」と。操曰く,「今，當に十吏をして夫人に就きて之を寫さしむべし」と。文姫曰く「妾聞く男女の別，禮に親授せず。紙筆を給わらんことを乞う。眞草は唯命のみならん」と。是に於いて繕書して之を送るに，文遺誤無きなり。

後に亂離に感傷し，追懷悲憤して詩二章を作

る。其の辭に曰く，

漢季權柄を失し，董卓天常を亂す。志は簒弑を圖らんと欲し，先ず諸賢良を害す。逼迫して舊邦に遷らしめ，主を擁して以て自ら彊む。海内に義師を興し，共に不祥を討たんと欲す。卓衆來りて東下し，金甲は日光に耀く。平土の人脆弱にして，來兵は皆胡羌なり。野に獵するごとく城邑を圍み，向う所悉く破亡す。斬截して孑遺無く，尸骸相掌拒す。馬邊に男頭を縣け，馬後に婦女を載す。長驅して西の關に入るに，迴路は險にして且つ阻なり。還顧すれば邈冥冥として，肝脾爲に爛腐す。略する所萬計有りて，屯聚せしむるを得ず。或は骨肉の俱にする有りて，言わんと欲すれど敢えて語らず。意を機微の閒に失えば，輒ち言う「斃降虜，要當（まさ）に以て刃を亭むべし，我が曹は汝を活かさじ」と。豈に復た性命を惜まんや，其の詈罵に堪えず。或は便ち棰杖を加へ，毒痛參じえ并び下る。旦には則ち號泣して行き，夜には則ち悲吟して坐る。死なんと欲すれども得る能はず，生きんと欲すれども一の可なるも無し。彼の蒼たる者何の辜ありて，乃ち此の戾禍に遭いたる。

邊荒は華と異なり，人俗義理を少く。處る所霜雪多く，胡風春夏に起る。翩翩として我が衣を吹き，肅肅として我が耳に入る。時に感じて父母を念えば，哀歎窮り已むこと無し。客有り外從り來れば，之を聞きて常に歡喜す。迎へて其の消息を問うに，輒ち復た鄉里に非ず。徼時の願いに邂逅し，骨肉來りて己を迎う。己は自ら解免するを得るも，當に復た兒子を棄つべし。天屬人心に綴り，別れて會する期無きを念う。存亡永く乖隔し，之と辭するに忍びず。兒前みて我が頸を抱き，問う「母は何くにか之かんと欲する。人は言う『母は當に去るべし，豈に復た還る時有らんや』と。阿母は常に仁惻なるに，今何ぞ更に慈ならざる。我尚未だ人と成らず，柰何ぞ顧思せざるや」と。此を見て五内崩れ，恍惚として狂癡を生ず。號泣して手を撫摩し，發するに當りて復た回疑す。兼ねて同時の輩有り，相送りて離別を告ぐ。我獨り歸るを得たるを慕い，哀叫して聲摧裂す。馬は爲に立ちて踟躕し，車爲に轍を轉ぜず。觀る者皆歔欷し，行路亦嗚咽す。去り去りて情戀を割き，遄やかに征きて日びに遐かに邁く。悠悠たり三千里，何れの時か復た交會せん。我が腹より出し子を念い，匈臆爲に摧敗す。

既に至れば家人盡き，又復た中外無し。城郭は山林と爲り，庭宇に荊艾生ず。白骨誰なるかを知らず，從横覆蓋する莫し。門を出づれば人聲無く，豺狼號び且つ吠ゆ。煢煢として孤景に對し，怛咤肝肺を糜らす。高きに登りて遠く眺望すれば，魂神忽ち飛び逝く。奄として壽命盡くるが若きも，旁人相寛大にす。爲に復た彊いて視息すれども，生くと雖も何にか聊賴せん。命を新たなる人に託して，心を竭くして自ら勗め厲ます。流離して鄙賤と成り，常に復た捐廢せられんことを恐る。人生幾何の時ぞ，憂ひを懷きて年歳を終えん。

其の二章に曰く，

嗟薄祜にして世患に遭い，宗族殄びて門戸單つなり。身執略せられて西の關に入り，險阻を歴て羌蠻に之く。山谷眇として路曼曼たり，眷として東に顧て但だ悲歎す。冥べにして當に寢すべくも安らかなること能わず，飢えて當に食すべくも餐すること能わず。常に涕を流して眥乾かず，志節を薄んじて難に死せんことを念う。苟くも活きたりと雖も形顔無し。

惟れ彼方は陽精に遠ざかり，陰氣凝りて雪夏に零り，沙漠壅ぎて塵冥冥たり，草木有りても春榮かず。人は禽に似て臭腥を食らい，言は兜離して狀は窈停たり。歳聿に暮れて時邁き征き，夜悠長にして門扃を禁ず。寐ること能わずして起ちて屏營し，胡殿に登りて廣庭に臨む。玄雲合さりて月星を翳くし，北風厲しく肅として泠泠たり。胡笳動きて邊馬鳴き，孤雁歸りて聲嚶嚶たり。樂人興じて琴箏を彈き，音相和し悲しみて且つ清めり。心思いを吐きて匈憤盈ち，氣を舒べんと欲して彼の驚かんことを恐れ，哀咽

を含みて涕頸を沾す。

家既に迎えて當に歸寧すべく，長路に臨みて生める所を捐つ。兒は母を呼び號して聲を失い，我は耳を掩いて聽くに忍びず。追いて我を持し走ること煢煢たり，頓き復た起ちて顔形を毀なう。還りて之を顧れば人の情を破り，心怛絶し死して復た生けり。

以上に掲げた「悲憤詩」を，真偽論を含めテクストとしてどう理解するか。その試みは，宋の蘇軾が最初であろう。以後，明・清時代にいたるまで，詩話の類を含め「悲憤詩」に対する言及が散見されるが，本格的な「悲憤詩」の研究は，1950年代に入り戴君仁・余冠英の論考が発表されてから以後のことと言える。拙稿は，戴・余氏の論説から順次検討・私見を加えていくことにする。それ以前の蘇軾等の説はその都度，適宜参照したい。論文配列は基本的に発表年次に従う。

三

1950年代以後本格化した「悲憤詩」の研究史を概観するならば，1980年代までは，作品の真偽を問題とした「悲憤詩」の本事研究が中心であった。以下，発表年順に論文名を掲げ通し番号を付す。

⑴　戴君仁「蔡琰悲憤詩考証」(『大陸雑誌』 4-12）1952[3]

「悲憤詩」二首の偽作説として，蘇軾の説[4]がまず引かれる。蘇軾は，「悲憤詩」が北朝の作とされる「木蘭詩」に類するもので，東漢時代にないスタイルであること。また蔡琰の流離は父蔡琰の没後であるはずだが，詩に董卓の乱によって胡中に捕えられたと言うのは矛盾である。けだし偽作者の粗略であり，『後漢書』が「悲憤詩」を載せるのはでたらめだ —— という二点を述べている。

戴君仁は，蔡琰は父邕没後の興平中に胡騎に捕えられた記す『後漢書』と，詩本文との矛盾を指摘する蘇軾の説に対し，宋の蔡寛夫『詩話』[5]を引く。蔡寛夫は，蘇軾の説く「悲憤詩」偽作説と反対に，董卓の専横と反董卓軍の挙兵により中原に大乱がもたらされ，士大夫が家族と離散する場合もあった。蔡琰が胡中に没したのは，必ずしも蔡邕が誅せられた後とは言えない。また詩の内容から，蔡琰は袁紹軍の山東兵により掠われた —— と述べ，さらに「感時念父母」と言っているから，蔡邕がまだ生きていたことは明らかだと説く。

戴君仁は，蘇軾に反駁した蔡寛夫の説に従う一方，蔡琰が山東兵に拉致されたと言うのは史料の裏付けが無いと述べ，続けて清の沈欽韓の説[6]を引く。沈欽韓は，『後漢書』南匈奴伝[7]に，霊帝が崩じて天下が大乱し，於扶羅単于の軍が河内を進攻したという記載を挙げる。さらに続けて『三国志』魏書[8]に，初平３年，曹操が於扶羅を撃破したと記し，初平４年に袁術が陳留郡を攻めた際に，於扶羅等がそれを補佐したことを記しているのを引き，蔡琰はその際掠われたと説いている。沈欽韓が，蔡琰拉致を『後漢書』に云う興平中ではなく，初平年間のこととする説を，戴君仁は，大筋で認めながら，「悲憤詩」の記述に照らし，蔡琰は等卓の部下に拉致されたのであって，於扶羅の陳留進攻とは無関係だと述べる。

戴君仁は，『後漢書』董卓伝[9]の中平６年の記述から，董卓に胡羌の兵がいたことをまず確認し，「悲憤詩」の「卓衆来東下」「平土人脆弱」両句から，蔡琰は父と離れて東の平原に位置する陳留の実家にいたと説く。

何焯「義門読書記」[10]は，『後漢書』董卓伝[11]に，李傕・郭汜が，卓の命で朱儁を撃破し，ついで陳留・潁川の諸県を殺掠したとあるが，その際，蔡琰が捕らえられたと記している。戴君仁は，何焯の説を是とし，初平３年，４月に董卓が誅せられ，同年６月，李傕・郭汜が長安を陥落したことを挙げ[12]，「悲憤詩」に「長駆西入関」とあるのは，この時の史実を述べていると説く。

さらに戴君仁は，興平２年，李傕・郭汜は献帝を脅かして長安を出，南匈奴の左賢王去卑等と交戦するが，その際に蔡琰は南匈奴の部伍中に虜にされた[13]と考察している。そして，『後漢書』に興

平中と言うのは，蔡琰が南匈奴に捕らえられた時間であること。『後漢書』献帝紀[14]の記載により，董卓が長安に至ったのは初平２年４月で，『後漢書』朱儁伝[15]と何焯の引く『後漢書』董卓伝の記載から，蔡琰が陳留において拉致されたのは初平年間[16]のことと述べる。

戴君仁は，蔡琰が拉致された時点で蔡邕はまだ死没していないから，詩中の「感時念父母」の句は実情にあっているとし，「悲憤詩」が蔡琰の作であると結論する。さらに補足して，蔡琰が「悲憤詩」を制作したのは，初平年間の拉致から数えて建安８年，あるいは，興平中に南匈奴の手に渡ったときから数えれば建安12年に帰漢して以後と考察する。また，蔡琰帰漢の頃は，「悲憤詩」に「漢季」とあるように曹操の勢力がすでに成り，建安詩人が五言詩を大いに作りはじめる時と符合するとも説いている。そして，「悲憤詩」のような長編の五言詩は「孔雀東南飛」の原形や五言の漢楽府にその来源を求めることができ，音律に長じていた蔡琰が知ることのできた楽府歌辞も多かったと考察する。

最後に戴君仁は，五言の「悲憤詩」が「新調」とすれば，楚辞体の第二首は「老調」だと述べ，蔡琰は新旧の様式に長じた詩人であり，文学史上重要な位置を占めると説く。

戴君仁の説は，「悲憤詩」の記述が史実に照らし整合性を持つことを詳論するが，後掲の余冠英説と重なる所が多い。

ただ，戴君仁が「感時念父母」の句の読み方を，蔡琰拉致を邕没以前のことと考える根拠と結びつけている点は疑問である。かりに戴君仁の説くようであれば，この句は，蔡邕死後数年を経て，蔡琰が李傕・郭汜から南匈奴に移った興平２年以後のことを詠んでいるのであろう。また，戴君仁は，「悲憤詩」が後人の偽作だとすれば，このように「真切」ではありえないと述べるが，印象批評に過ぎまい。

⑵　余冠英「論蔡琰悲憤詩」（『漢魏六朝詩論藪』棠棣出版社，1952）

前掲⑴戴は，６月の発行であるが，余冠英の『漢魏六朝詩論藪』は，同年８月の発刊となっている。同書所載の「論蔡琰悲憤詩」には，執筆日付が付されてない。論文公表の順次から，⑴の後に置く。

余冠英は，まず⑴戴と同じく，『後漢書』所収の「悲憤詩」を偽作とみる蘇軾の説[17]を挙げる。そしてそれが，五言の「悲憤詩」に向けられた疑念であって，後の胡応麟『詩薮』[18]や許学夷『詩源弁体』[19]は，ひとり騒体の「悲憤詩」のみ真作とし，五言体の方を偽作と見ていると述べている。

余冠英は，鄭振鐸『中国文学史』[20]を例に挙げるが，鄭振鐸は，あらまし，次のような見解を示す。〈楚辞体の「悲憤詩」は雄渾・質朴であり表現が精錬されている。蔡琰が詩を残したとすれば，楚辞体の一首のみに違いない。蔡琰は，学者の娘で古典の素養が深いからそのような詩体を用いた可能性が高い。五言体の方は，表現が増益している上，父蔡邕が董卓の臣であるにもかかわらず，蔡琰が董卓を痛罵するはずがない。〉

余冠英はこのように，「悲憤詩」二首の真偽論も一様ではないとした上で，それらを考察するために，「悲憤詩」の本事を明らかにすべきであると論じる。彼は，『後漢書』では明らかにされていない蔡琰拉致の事情を見る上で，⑴戴と同じように『後漢書』集解[21]に引かれる沈欽韓と何焯の説を考察材料に用いる。その結果，⑴戴と同様，余冠英は，『後漢書』献帝紀等の記述により，蔡琰は，初平３年正月に董卓軍の胡騎に捕らわれた後，興平２年11月，南匈奴の手に渡ったと述べる[22]。

余冠英は，蔡琰が李傕・郭汜の軍隊から南匈奴に再拉致された経緯を，『後漢書』董卓伝[23]・同南匈奴伝，『後漢紀』献帝紀から説明する。その際，李傕・郭汜に戦勝したのは，史料によって南匈奴の左賢王去卑とするものと右賢王去卑とするものと両様あるが，その差は問題ではないとも述べる。

さらに，『後漢書』南匈奴伝の李賢注[24]により，左（あるいは右）賢王去卑の居留地を，河東平陽，今の山西省臨汾付近とし，『後漢書』董祀妻伝に，「没於南匈奴左賢王，在胡中十二年」と記されるの

は平陽のことで塞外ではないと説く。余冠英は，興平２年から12年を経た建安11年は，曹操が并州の高幹を征した年であること，曹操の行軍先は，平陽に近いこと，高幹はかつて南匈奴に援軍を求めて拒否されていること，それらの情況から，曹操が建安11年に南匈奴から蔡琰生存の情報を得，贖って返還させたのであろうと推測している。そして，金璧で贖われた点から推して蔡琰は胡王の妃妾ではなく，部伍の者に嫁したと見なしている。余冠英は，⑴戴論文より，蔡琰の拉致された場所と時間についてより具体的な考察を施していると言えよう。

以上のような考証を踏まえ，余冠英は，蔡琰がもし「悲憤詩」を自ら制作したとすれば，詩の叙述と史実が符合する五言体の一首のみであって，騒体の方は，偽作と断じる。騒体が描く「惟彼方兮遠陽精，陰気凝兮雪夏零，沙漠壅兮塵冥冥，有草木兮春不栄」という風景は，河東平陽のものではないこと。また騒体の方が「歴険阻兮之羌蛮」と記すのは事実に合わない，というのがその理由である。

余冠英は，ついで，前掲の蘇軾説と，それを踏襲した閻若璩『尚書古文疏証』[25]の記載にふれる。後者の要旨は次の如くである。〈実証と虚会があるとすれば，蘇軾の説で蔡琰の詩は後漢時代に無い様式だと言うのは虚会であり，一方，蔡琰の流離は父蔡邕の没後であり蔡琰詩を偽作とするのは実証である。〉

余冠英は，自身の以上の考察に照らして蘇・閻両者の蒙昧を批判し，詩と伝の叙述の違いが見られる時は，他の資料を参照してその所以を見，詩と伝が互いに補っているかどうかを考えるべきだと主張する。

さらに余冠英は，「蘇氏『虚会』之処」を問題にし，曹操「薤露行」「蒿里行」・王粲「七哀詩」・「孔雀東南飛」等を例示し，五言詩は当時一般的に流行していた詩型であると述べる。また，劉宋以前のどの時代にも，建安の詩歌より五言の「悲憤詩」に近い作品は存在しないとも言う。

余冠英は，最後に『後漢書』の伝では「無嗣」とされた蔡邕の後嗣問題と蔡琰が拉致されたのは陳留なのか否かという点について言及する。『世説新語』軽詆篇の注に引く「蔡允別伝」[26]と『晋書』羊祜伝[27]の記載から，蔡邕に二人の孫が存在した可能性が考えられる。しかし余冠英は，『晋書』蔡豹伝[28]を反証として，その可能性を否定し，「悲憤詩」に「既至家人尽」とあるのは史実と矛盾しないと説く。

拉致された場所と時間について，余冠英は，李傕・郭汜の軍が蔡琰のいる陳留を掠殺したのが，初平３年春であり，蔡邕は同年夏４月に殺される。親子の空間距離は遠く，時間的距離は近いので，お互いの消息は伝わらなかっただろう，と考察する。

総じて，余冠英は「悲憤詩」の真偽問題を，実証的な方法で解明しようと試みる。先の戴君仁論文と併せ，「悲憤詩」の理解に大きな一歩を踏み出したと言えよう。余冠英説の是非・問題点については，後掲の論説との対比の中で検討したい。

⑶　張少康「蔡琰“悲憤詩”本事質疑」(『文史哲』1958-3)1958

前掲⑵余論文に対し疑義を呈し，反証を試みたもの。

張少康は，『後漢書』董卓伝・『後漢紀』献帝紀により，興平２年の李傕・郭汜と南匈奴去卑の動向を再検討する。結論を言えば，張少康は，李傕・郭汜の軍による興平２年の戦さにおいて，蔡琰が李傕・郭汜の軍から，南匈奴右賢王去卑に渡った可能性は低いと見なしている。さらに，余冠英が説くように，初平３年に拉致され興平２年の冬11月に去卑の軍に落ちたとすると，それにいたるおよそ４年間，蔡琰は李傕・郭汜軍とともに長安にいたはずだが，その間の事情が「悲憤詩」には何も述べられていないと疑念を呈する。この点は後掲⑿譚・⒄内田が同様の疑念を呈している。

そこで張少康は，余冠英の説く初平３年の陳留における蔡琰拉致について再検討を試みる。まず，初平３年春は董卓誅殺の前で，李・郭は董卓の部

下であり，蔡琰が董卓政権の大官，蔡琰の娘だと知れば解放するだろうと推察する。〔これに類する考察は，後掲⑾王・⒀卞等も行うが，それに対する説得性の高い別の見方が，後掲⒄内田等に示される。〕さらに，蔡琰が陳留にとどまっていたのかどうかという点について，『後漢書』董祀妻伝に記される通り，最初の夫の没後実家に帰ったが，その実家は陳留ではなく，蔡琰の居住する長安であったと考察する。

張少康は，『後漢書』董祀妻伝の興平２年拉致の記載をもとに，『後漢紀』献帝紀の興平２年の条[29]に，李傕が郭汜を破るため，婦女・財物を与えることを交換条件に羌胡数千人を招き入れたとする記録により，この時蔡琰が胡騎の手に落ちたのだろうと推定する。また，その胡騎は南匈奴に属する者であったろうとも言う。したがって張少康は，蔡琰拉致は，父の死後と見なせると述べている。また，「悲憤詩」に「感時念父母」とあるのは，「偏義復詞」であり母のみを指すと説く。

以上のような考察の結果，張少康は，「悲憤詩」が史実に合わないから偽作であると結論づけずに，五言「悲憤詩」の前半８句は，蔡琰自らの事跡ではなく董卓の乱を一般的に詠んでいる，という説を展開する。そして「長駆西入関」は，蔡琰が父と共に長安に至った時の記憶であり，そこから，興平２年に胡騎に掠われた後の自分の体験が述べられる，という独特の解釈を提示するのである。

張少康の論説は，「悲憤詩」の真偽を論ずるよりも，⑵余への反論を重点にした所に特徴がある。したがって，たとえば同じ史料にしても⑵余との読み方の違いが強調されている。そのためか，史料の取り扱いにやや性急さが見られるのも否めない。たとえば，蔡琰を含む蔡邕一家が長安に在ったとする論拠の一つに，『三国志』王粲伝[30]が引かれている。長安において，王粲が蔡邕に面会した時に，蔡邕が述べた「吾家書籍文章，尽当与之」という部分の「我家」に注目するのは，牽強付会であろう。

⑷～⒀『胡笳十八拍討論集』（中華書局，1959）所収論文。

1959年に中国の学会で，「胡笳十八拍」の真偽問題に関する論争が巻き起こったが，それらを収めた論文集。入矢義高「『胡笳十八拍』論争」[31]に，本書に収められた各論文の概要と，論争の背景が紹介されている。入矢は，この論争が，「胡笳十八拍」の真偽論にとどまらず，匈奴の情勢を含む漢末の歴史，漢魏の楽府文学，関連する文体論・修辞論・上古音韻論，中国音楽史，文献学的方法論の検討等，多岐にわたる問題に広がっていったと述べている。「悲憤詩」に関する研究も，この「胡笳十八拍」論争が刺激・契機となり推進されていった面がつよい。

『胡笳十八拍討論集』から，拙稿で以下取り上げるのは，「悲憤詩」の理解に関わると思われる郭沫若・王先進・譚其驤・劉開揚・卞孝萱の各論文〔⑷～⒀〕である。

⑷郭沫若「談蔡文姫的《胡笳十八拍》（『胡笳十八拍討論集』中華書局，1959）

郭沫若の論文は，『胡笳十八拍討論集』に６篇登載される。「胡笳十八拍」に論究し，偽作論に対する反論を試みたものだが，郭沫若が対象とする偽作論は，拙稿で逐次取り上げる論説とも重なる。したがって，ここでは蔡琰の本事等，「悲憤詩」に関わる所説を選び概観してみたい。郭沫若は，「胡笳十八拍」真作論を唱えているが，五言体の「悲憤詩」についても真作と見る。だが，騒体の「悲憤詩」は，作品価値が極めて低いから別人の偽作だろうと述べている。この発言は，印象批評に過ぎない。

蔡琰の経歴は，最初の夫死後，陳留に帰った（初平３年）時胡人に捕らえられた。その後，興平２年に右賢王去卑が，献帝を侍衛して李傕・郭汜を撃った時に，南匈奴に拉致された，と説いている。しかし郭は，最初の拉致と再拉致の情況について，史料を挙げて説明しない。一方，⑵余等の先行論文に言及することもない。

郭沫若は，蔡琰の事跡に「曹操的偉大」を見出せると述べる。曹操が蔡琰を南匈奴から贖い戻し

たのは「文化的観点」からで，曹操の文治武功のなせるわざであると説いている。

⑸　同「再談蔡文姫的《胡笳十八拍》」

蔡琰の初婚年を，丁廙「蔡伯喈女賦」[33]の記載から，初平３年春と推定。郭沫若は，前掲⑷で，同年，故郷陳留において蔡琰が拉致されたと説いているので，結婚後まもなく夫衛仲道は没したと見なしているのであろう。

⑹　同「四談蔡琰文姫《胡笳十八拍》」

『後漢書』南匈奴伝・『晋書』匈奴伝の記述から推測して，蔡琰が南匈奴において居住したのは，西河美稷地域である可能性が高いと論じている。この説に関連するより詳密な論究は，後掲の⑿譚にある。

⑺　同「五談蔡琰文姫《胡笳十八拍》」

「隋志」所載の「後漢黄門郎丁廙集一巻」注に「後漢董祀妻蔡文姫集一巻」が著録されている。郭沫若は,「胡笳十八拍」に関しては判断しがたいが,『後漢書』の本伝は,「隋志」の著録する蔡琰の別集に基づいて,「悲憤詩」二首を収録したのだろうと推測する。

⑻　劉開揚「関於蔡文姫及其作品」（初出,『文学遺産』264，1959）

⑷⑸郭の所説に対する反駁として提出され,「胡笳十八拍」は偽作,「悲憤詩」二首は真作と論じる。蔡琰の本事に関する考察の趣旨は，⑴戴・⑵余とほぼ同様。初平年間に董卓麾下の部隊に掠われ，興平年間に，右賢王去卑に再拉致されたとする。

劉開揚論文で独自の観点を示すのは,五言の「悲憤詩」はもともと二首からなっており,『後漢書』の「悲憤詩」は騒体を含め全体で三首に分けるべきであると説く点である。すなわち，五言「悲憤詩」の41・42句目「彼蒼者何辜，乃遭此厄禍」にいたる，李傕・郭汜軍中の羌胡に掠われた経緯を述べる部分までが第一首,「辺荒与華異」以下が，南匈奴に没し最後に漢に帰る所までを詠む第二首であると考察する。

⑼　李鼎文「《胡笳十八拍是蔡文姫作的嗎》」（初出『文学遺産』265，1959）

李鼎文は「胡笳十八拍」偽作論を展開し,「悲憤詩」には論究しないものの参照すべき意見を示す。その第一点は,『資治通鑑』の記事によれば，蔡琰が南匈奴に在ったであろう興平２年から建安11年は，南匈奴が曹操に服従していく過程にあった（したがって「胡笳十八拍」が南匈奴と漢との交戦を述べているのは史実に反する）こと。第二点は,『資治通鑑』の興平２年の条に，南単于於扶羅が没し，弟呼厨泉が立って平陽に居住したと述べ，その胡三省注[33]に,平陽は河東郡に属すとある。これは農耕文化圏に属す（したがって,「胡笳十八拍」で遊牧生活を描いているのはおかしい）地域であること。

仮に李氏の以上の指摘に従うとしても,「胡笳十八拍」に指摘される風景と地理との矛盾は,「悲憤詩」には必ずしも当てはまらないように思う。この問題に関しては，後掲の⑿譚でも触れられる。

⑽　王達津「《胡笳十八拍》非蔡琰作補証」（初出『文学遺産』265，1959）

南匈奴における蔡琰の居住地は，郭沫若の主張する西河美稷ではなく,『後漢書』南匈奴伝,『晋書』載記[34]の記述から河東平陽（もしくは太原付近）であることを説く。

王達津の論は⑼李とともに，蔡琰の居住地に関し，結果的に⑵余説を補足するものとなっている。とは言うものの，先行研究⑴⑵に何ら言及されていない。このことは,「胡笳十八拍」論争全体に見られる傾向である。

⑾　王先進「根拠蔡琰歴史論蔡琰作品真偽問題」（初出不明，1959）

董卓と蔡邕，および董卓と李傕・郭汜が主従関係にあったことから，蔡琰が蔡邕存命中に李傕・郭汜の部伍に掠われるはずがないとする。これは，蘇軾以来の説と同様。従って，王先進は，初平年間に陳留において拉致されたという⑻劉を否定し，蔡琰は興平中，左賢王去卑の軍に掠われたと主張する。

王先進は，去卑の居留地が河東平陽とすれば,「悲憤詩」の描く塞外の情景と符合しないと述べる

が，この問題は論拠に多少の違いはあれ，後掲の他の論文でも取りあげられている。王先進論文では，「悲憤詩」は，五言体の真偽は不明，騒体は偽作と断じている。

⑿　譚其驤「蔡文姫的生平及其作品」（初出『学術月刊』1959-８，1959）。

まず，「悲憤詩」に対してこれまで提出された疑問を次のように整理。１，『後漢書』董祀妻伝に，蔡琰は南匈奴左賢王に没したとあるのに，五言の「悲憤詩」では董卓の部伍に捕らえられたと述べる矛盾。２，蘇軾が提出した，蔡琰は董卓の幸臣だから，蔡琰の流離は父の死没後ではないかという疑念。３，騒体「悲憤詩」に「歴険阻兮之羌蛮」とあるのは，南匈奴と矛盾する。また騒体の描く風景は，河東平陽一帯のそれと適合しない。以上の３点に付け加えて，五言体の方の「辺荒与華異，人俗少義理，処所多霜雪，胡風春夏起」等の語は，河東の地理環境と合わない。また「長駆西入関」「身執略兮西入関」という行程は，陳留もしくは長安から河東へという，南から北への方向とずれる。

譚其驤は，以上の疑問に対し，南匈奴だけでなく，董卓の部下にも胡人はいた。南匈奴は中平五年以来分裂し，於夫羅・呼厨泉・去卑の部伍は河東一帯に移り住んだが，それ以外は後漢初年以来の居住地である南庭故地，今の内蒙古自治区・河套に在った。また，董卓の部隊は規律が無く，特に羌胡の部隊は董卓すら手を焼いていた。だから，蔡琰の拉致は，董卓・蔡邕没以前にもありうる。結果，「悲憤詩」二首は，歴史事実と符合し蔡琰の自作であると述べ，さらに次の３点について考証を進める。

①蔡琰はいつどこで拉致されたか。→戴君仁・余冠英と同じように，初平３年春，陳留において董卓の部下，李傕・郭汜の手に落ちたと考察。しかし，⑴戴・⑵余説と異なり，興平２年に南匈奴右賢王去卑が，李傕・郭汜に勝利した際に，南匈奴に移ったという事実はないと主張する点は，⑶張の論旨に近い。譚論文は，さらに「悲憤詩」は最初の拉致の事情のみ描写し，南匈奴へ再び略取された時の様子が何も描かれていないとし，結局，『後漢書』董祀妻伝の興平２年拉致の記載を誤りと判断する。

董卓の胡騎から南匈奴へ移る際の蔡琰の模様が，「悲憤詩」から窺いにくいという疑問は，前掲⑶張・後掲⒄内田も提出する。

②蔡琰は，どのように南匈奴左賢王に没したか。それはどの場所か。→「悲憤詩」の描く風景からして，蔡琰が没したのは，南庭（美稷＝并州北部・南単于庭）に居留していた南匈奴であり，左賢王とは南庭の地のそれであると考察。曹操は，建安七年以後河東の南匈奴を制圧しているので，「以金璧贖之」する必要はなかったし，南庭の南匈奴とも連絡しえたのであろうと推察。譚其驤は，蔡琰は，李傕等の部伍であった胡騎部隊により初平３年に掠われた。しかし，李傕等の手に渡ることなく，最終的に南庭の南匈奴まで連れ去られた，と推断する。「悲憤詩」の「悠悠三千里」という距離も陳留から南庭までの距離と符合すると述べる。

③蔡琰は，いつ漢に戻ったか。→初平３年に略取されてから数えて12年，すなわち建安８年（203）と推定。

以上，⑿譚の所論は，「悲憤詩」という詩的世界を前提に，逆に史書の誤りを正そうとする。結果，蔡琰が河東ではなく南庭の南匈奴に移ったと推測するが，左賢王とは南庭の地のそれであることを示す史料はない。また，蔡琰が帰漢したとする建安８年当時の，曹操と南庭の南匈奴との関係を示唆するものは，史料と見なした場合の「悲憤詩」以外存在しない[33]。史実と作品の関係をどうとらえるべきか。この問題は，更に後掲論文を概観する際に考察する必要があろう。

なお，譚其驤は，興平２年に南匈奴右賢王去卑が李傕・郭汜に勝利した際，蔡琰が南匈奴に移ったという事実はないと説くが，逆にその史実を示唆する史料は，⑴戴・⑵余がすでに指摘していた。しかし譚論文では，そのことに対する反証や言及はなされていない。

⒀　卞孝萱「談蔡琰作品的真偽問題」（初出不明，

1959）

「悲憤詩」偽作説。蘇軾の説に同じ。蔡琰拉致は，董卓に重用された蔡琰没後と判断できるから，董卓軍が拉致したと詠む「悲憤詩」は偽作と論じる。卞孝萱はさらに，蔡琰の連れ去られた先は，『後漢書』南匈奴伝の李賢注の記述から河東平陽であるが，詩中の情景はその地方のものと矛盾すると述べる。詩と史実との矛盾に関して，たとえば，「既至家人尽，又復無中外」と詠んで，親族（中表）のいないことを言うが，『晋書』景献羊皇后伝・同蔡豹伝から蔡琰に孫のいたことが解る，とも論じる。卞孝萱による「既至家人尽，又復無中外」の解釈は，詩的言語と日常言語を同一視したものである。⑿譚説もそうであるが，史実と作品の比較検討には慎重な配慮が要されるように思われる。

卞孝萱の偽作論の論拠は従前の説と変わらないが，一点大胆な見解を示す。すなわち，『蔡琰別伝』[66]は，『後漢書』の以前に作られたであろうこと，『別伝』に引かれる騒体と五言の詩句は，「悲憤詩」のそれと同じであること。以上から，「悲憤詩」は，先に『蔡琰別伝』に載録され，『後漢書』董祀妻伝は，それを踏襲したのだろうと推測する。しかし，この見方は卞孝萱の作業仮説であって，特に根拠はない。

最後に，「悲憤詩」が，『文選』『玉台新詠』に選録されず，『文心彫龍』『詩品』においても言及されないのは，それらが「悲憤詩」を仮託と見ていた証拠であると述べる。

卞孝萱が示す「悲憤詩」が六朝の総集類に見えないという疑問は，その通りである。「悲憤詩」が魏晋及び六朝期にほとんど言及されないのは，たとえ偽作と仮定したとしても理解しにくい。「悲憤詩」がどう受容されていったかについては，今後なお詳細な検討が必要であろう。

「悲憤詩」および蔡琰に対する言及は，曹丕・丁廙「蔡伯喈女賦」にわずかに見える他，六朝期を通じてほとんどない。「隋志」に著録される「蔡文姫集」も梁代にはすでに佚している。蔡琰をめぐる後世の受容は，拙稿とは別の課題になるが，前代の文学因襲の上に成立したであろう唐詩の用例（『全唐詩』に20数例ほど）を見ても，歴史故事としての蔡琰を詠むものがほとんどで，「悲憤詩」，もしくは蔡琰と「悲憤詩」の創作の関係を窺わせる言及は見られない。このように，「悲憤詩」の受容史・読書史は，歴史の表面にあまり表れていないのではないだろうか。この点は他日の考察にゆだねるが，作家蔡琰の姿が見えにくいということも，「悲憤詩」の理解を困難にさせる一因であろう。

⒁　労幹「蔡琰悲憤詩出於偽託考」（『大陸雑誌』26-5，1963）

「悲憤詩」と『後漢書』董祀伝の記載が適合しない点を列挙する。たとえば，「悲憤詩」で，「長駆西入関」の後の経緯が詠まれず，胡境の描写が始まるのは，作者が，董卓麾下の胡騎と南匈奴単于との区別をしていなかったからである。しがたって，董卓の部伍に拉致された後，転じて南匈奴に連行された可能性はない ── と論じる。労幹は，蔡琰は興平２年に長安において南匈奴に拉致されたと見なしている。

最後に，労幹は，後漢には班固・趙壱・酈炎等の詩人がいるが作品はまだ質朴であることや，秦嘉夫婦の詩は偽作の可能性もあること，それらと，「悲憤詩」の作品水準を比較したときに，これを建安文学の作品に位置づけがたいと結ぶ。しかし，蔡琰の活動期は，建安年間以後とすべきで，労幹のこの比較は時代が多少ずれている。

董卓麾下の胡騎から南匈奴に転じた経緯が「悲憤詩」から読み取れないという労幹の論究は，⑶張・⑿譚・後掲⒄内田と同様。

⒂　李日剛「蔡琰悲憤詩之考実弁惑与評価」（『師大学報』12，1967）

はじめに，「悲憤詩」について，宋の蘇軾・閻若璩・⒁労等が偽作とし，清の張玉穀・沈韓欽・何焯・⑴戴・⑵余等が真作としたことを述べる。以下，李日剛は，「広明戴氏之論証」と言い，戴君仁の説に大きくよりながら，「悲憤詩」真作説を主張する。論証の方法は，⑴戴・⑵余説にほぼならい，初平３年正月に董卓配下の胡騎に掠われ，興平２年

11月に，南匈奴右賢王（献帝紀は左）の手に渡ったという説を展開する。

李日剛は，蔡琰拉致の足跡から「悲憤詩」の「悠悠三千里」とあるのは，陳留から長安までが約1500里，長安から洛陽を経て，去卑の居留地平陽までがほぼ1500里だから，事実に合うと述べる。従前見られなかった指摘と言えよう。このような具体的な考究や，若干の資料の補足以外は，おおむね戴・余氏説を用いている。

ただ問題なのは，李日剛は明らかに⑴戴の文章を，引用の断り書きなくそのまま用いることである。たとえば，以下の記述[67]は，戴君仁のものとほとんど同じである。「『感時念父母，哀歎無窮已』『既至家人尽，又復無中外』等の語は異とするに足らず，また戦乱の実情と十分適合している。もし後人の偽作であれば，このように真切ではありえない。まして范曄の『後漢書』は，衆家の書を編集したものである。蔡琰が興平中に南匈奴に没したという記録はつとにあったはずで，もし後人の偽作であれば，ただ興平年間の事を知るのみである。決して董卓遷都の所から述べることはないのに，「卓衆来東下」等の語があるから，「悲憤詩」が蔡琰の手になるものであることは明らかだ。」

この部分の⑴戴の論法自体，やや不適切と思われる。反対に，『後漢書』の編纂以前に佚したであろう，蔡琰に関する別の記事が存在した可能性もありうるのではないか。だが，李日剛が，⑴戴説を無批判に踏襲したことよりも，先行論文を参考・引用する場合は，そのことを明示すべきであろう。⑴戴の文章を，そのまま用いる部分は，他の箇所でも見られる。李日剛が最初に，「広明戴氏之論証」と断るのであれば，論文の主旨は，戴君仁の学説紹介ということになりはしまいか。李日剛自身の新知見も見られるだけに惜しまれる。

⒃　岡村貞雄「蔡琰の作品の真偽」（『日本中国学会報』 23，1971。『古楽府の起源と継承』〔白帝社，2000〕第３章蔡琰に転載。）

蔡琰作とされる「悲憤詩」二首・「胡笳十八拍」の三篇を一括，総合的に論じており，その考察方法は検討に値しよう。拙稿では，岡村貞雄の所説を紹介しながら逐次私見を述べたい。

はじめに，宋の蘇軾以来の多様な蔡琰作品真偽論について，三篇のそれぞれがどう判断されたか，その一覧を示す。また，三篇それぞれに対する様々な真偽判断と，作品評価の関係についても必ずしも一定しないと述べ，蔡琰作品のとらえ方がいかに複雑多岐かという指摘をする。たとえば，胡応麟『詩藪』・鄭振鐸『中国文学史』は，ともに騒体を蔡琰作とし五言体を偽作とするが，評価は双方食い違い，胡応麟は五言体は騒体より優れているが故に後人の偽作であるとし，鄭振鐸は，偽作された五言体より蔡琰原作の騒体の方が作品水準が高いと見ていることが紹介されている。

さらに岡村貞雄は，近年の郭沫若論文を発端とする「胡笳十八拍」論争について言及する。岡村は，『胡笳十八拍討論集』の中で「胡笳十八拍」偽作説を唱える研究に対し，逐一反論する余裕はないが，「この作品を吟味してゆくと，男が女性の立場になって偽作したものではなく，どうも女性自身による作品ではないか，という結論に達したから」，「胡笳十八拍」は真作と認めると，先に結論づける。この主張に対しては，後程愚見を述べたいと思う。

岡村は蔡琰に関わる所説中，本格的な論究は，余冠英と郭沫若二者によるものと断ずる。⑵余の要旨は前述したが，岡村貞雄のそれに対する批判は次のようなものである。〈余冠英は蔡琰の補囚された土地は，『後漢書』南匈奴伝の李賢注から，河東平陽とするが，『後漢書』董祀妻伝に「左賢王」とあるのと，南匈奴伝の記載に「右賢王去卑」とあるのとを同一視した誤りである。〉

この岡村貞雄の批判に対しては，後掲⒆鄭の考察をあらかじめ引いておこう。鄭文は，董祀妻伝に云う「左賢王」が誰かは，断定しがたいとしながら，こう述べる。〈『後漢書』献帝紀は「左賢王去卑」とし，董卓伝では「右賢王去卑」としていて一定しないのは，右・左の字形の近いことに因る誤りで，南匈奴伝・董卓伝により「右賢王」と

するのが正しいだろう。右賢王去卑の居住地は，南匈奴伝中の「河東」に関する李賢注以外に，『資治通鑑』建安21年秋７月の胡三省注にも，平陽とある。〉 鄭文は，他にも，河東平陽に関する考証を詳密に加え傍証としている。

岡村貞雄の所説に戻れば，「もし，蔡琰の三作を虚心に読むならば，いずれも塞外における苦しさ淋しさを歌っていると受けとられる」とし，⑵余が蔡琰補囚の地を平陽とする結果，塞外風景の描写が少ない五言体のみを真作としたことを批判する。

しかし，岡村の論法は，はじめに蔡琰の作品は塞外の情景を詠んでいるという前提を打ち立ててしまい，論理が逆転している。

岡村貞雄は，たとえば五言体に描かれる「悠悠三千里」について，蔡琰補囚の場所を河東の平陽と考えると，その隔絶間が実際と合わないと述べる。そして，その場所については，資料がなく，「今日のような地図を持たなかった蔡琰には，地理上どういう地点をさすらいつつあるか，彼女自身にもはっきり分からなかったのではあるまいか」と言う。

さらに，河東の地について，『後漢書』の伝に蔡琰が最初に嫁したのが「河東衛仲道」のもとであるとする記載を引き，「胡騎にさらわれ，胡人の妻となって，流亡の果てに落ち着いた所が再び河東であったならば，きっと作品の中に，その運命の皮肉を彼女は歌い込んだに違いない。けれども，どの作品にもそういう消息は影すら見えず，専ら塞外での生活が詠じられている」と説く。

「悠悠三千里」の示す距離感が不自然という疑問については，⒂李・後掲⒆鄭・㉔黄に説得力のある考察が示されている。

蔡琰初婚時の状況について，⒆鄭は，「河東衛仲道」の河東とは，衛仲道の本貫を指し，実際の嫁ぎ先ではないと推測している。しかし，⒆鄭のような推測を無理に行わなくとも，河東の範囲が，南北250km，東西200kmほどに及ぶ広範囲[38]であることを考えると岡村の考察・批判は，大雑把過ぎるように思う。

岡村貞雄は，余冠英の，伝記に基づきつつ「悲憤詩」に歴史的な穿鑿を加えるという方法論をも批判し，蔡琰作と伝えられる三作品を，「総合的な立場から比較しながら検討を加え」，「蔡琰の三作品を平等に見わたして，相互の特徴を比較」するというアプローチを説いている。しかし，この「総合的な立場」という前提を設定する必然性は明確ではない。⑵余が示す実証的考察は，作品理解の一つの方法に過ぎまいが，史実と作品との照合作業をある程度確実に押さえておくことが「悲憤詩」のような作品には，必要なのではないだろうか。なぜならば，後掲の㉔黄も示すように，「悲憤詩」は，自伝体の叙事的作品と一応は見なせよう。（岡村自身，「悲憤詩」について「遭遇する経験を自伝的に詳述して，長編の叙事詩を作り上げるという手法は，従来の人が試みなかった点である」と論じている。）「悲憤詩」が自伝詩かどうかに論議があるにせよ〔後掲㉗川合参照〕，出来事の推移を叙述する「悲憤詩」の背景にある具体的な史実を見極める作業が，まず欠かせないのではないか。作品真偽論に論究する以上，蔡琰の事跡と作品創作との関係を押さえておくべきだが，岡村はそれを閑却して，三作品自体の比較考察を進める。

岡村貞雄はまず，五言体の「悲憤詩」の特徴が，他の二作よりも帰漢後の叙述が詳しく，匈奴の残酷さが綿々と綴られているという二点を持つことから，「家に帰ってからの感慨も定着し，匈奴に対する怨訴もおおっぴらに述べることができる，そういう情況のもとで作られた」と推察している。続けて，それと対照的に騒体の方は，胡中における一夜の即興の作だろうと推定するが，それに至る論証に飛躍があり説得力を欠いているように思う。

岡村貞雄は，ついで「胡笳十八拍」にも論究するが，要は三作品とも叙事詩として「同質の密度を持って，同じレベルに達している」から，「同一詩人の技倆によってできた三篇であると考えた方が，より穏当であろう」と結論づける。岡村貞雄の作品真偽の判断の基底にあるのは，突出した作

品をもたらすのは，他に経験できない実体験であるという信念のようで，それに類する記述が，論説中にしばしば見られる。たとえば，三作品に共通して詠まれる（岡村貞雄は，「胡笳十八拍」を例示する）我が子への愛情表現について，「作者がほんとうに女性であって，真実の経験を語っている」から「切実深刻なものになってゆく」のだろうと考察される。

岡村貞雄は，「悲憤詩」に歴史的な穿鑿を加えるという方法論にこだわらず，三作品を，「総合的な立場から比較しながら検討を加え」ると先に宣言しているにも関わらず，作品の価値と作者の実体験は密接に関連するとあらためて主張するのは，話の筋が通らない。

関連してもう一点，岡村貞雄は，論文の冒頭で，「この作品を吟味してゆくと，男が女性の立場になって偽作したものではなく，どうも女性自身による作品ではないか，という結論に達したから」，「胡笳十八拍」は真作と認めると，先に結論づけていた。しかし女性自身の作品と判断する根拠については，我が子への愛情表現は，「作者がほんとうに女性であって，真実の経験を語っている」と繰り返される以外，何も示されていない[39]。

史料による考証よりも作品に内在する論理に注目する岡村貞雄の論法は，他にも五言体で描写される，胡騎の残虐性をどう見るかという点でも問題を引き起こす。すでに⑴・⑵の論考が提示するように，蔡琰は，董卓麾下の胡騎に略取された後，転じて南匈奴の部伍に移ったという説がある。「悲憤詩」の描く胡人には南匈奴の部族連合体を離れ，董卓のような漢土の群雄勢力に取り込まれた胡騎が存在する[40]という見方に対し，岡村貞雄は検討を加えようとしない。このように，「悲憤詩」が描く胡騎を等し並みに見ることが，作品そのものの誤読をもたらすことにならないだろうか。

もしも「悲憤詩」が蔡琰の「真実の経験」を語っているのだとすれば，逆にそれが，南匈奴史を含む漢末の歴史を探る史料にすらなるはずであるが，そのことに対する慎重な配慮が作品分析においてなされるべきではないか。

総じて，岡村貞雄の所説は，三作品を同列に扱い，総合的に考察するという壮図にとらわれて，史料と先行研究を未消化のまま，考察に無理な飛躍を重ねているように見受けられる。

なお岡村貞雄は，蔡琰作品の真偽論に関連して，「魏晋の時代の偽作はすべて原作の主題とは無関係に作られていた」，「魏晋の時代の人が，もし蔡琰に習って偽作を作っていたら，おそらくその詩も蔡琰の履歴とは関係のないことを歌っていたろうと思う」と述べている。蔡琰詩を晋宋間の偽作と仮定した場合，晋宋の文学因襲を把握する必要がある。その際の判断材料として，岡村貞雄の如上の説は，傾聴に値しよう。

⒄　内田吟風「いわゆる蔡琰悲憤詩について ― 匈奴史の一資料として ―（『史窓』 37，1980）

「悲憤詩」を文学として見たときにまず問題になるのは真偽論である。それを解明するために蔡琰の本事を考証するというのが，一般的な研究方法であった。その方向とは逆に，内田吟風は，「悲憤詩」を古代北方民族史を探るための史料として取りあげる。

冒頭を，初平元年に董卓が洛陽から長安に遷都した所から詠み始める「悲憤詩」は，全体が史実に合致していることがまず示される。先行論文には言及されていないが，蔡琰拉致の経緯は，⑴戴・⑵余と同様に捉えている。内田吟風は，「悲憤詩」108句の９句目「卓衆来東下」から40句目「乃遭此戹禍」までを初平３年に董卓の校尉李傕の率いる胡兵に拉致された事を描いていると述べる。また，蔡邕は娘の拉致を知らないだろうと言い，その理由として，蔡邕の遺文中に娘の罹災を知っていたことを示す文言がないこと，董卓が王允に殺されたとき，邕はその死を悼む色を現していたことを挙げる。そして当時の混乱は父娘の連絡を不可能にしていたか，父の死と娘の拉致がほぼ相前後する時期に起きたのだろうと推測している。蔡琰拉致は蔡邕死後ではないかという蘇軾・⑶張等が示し

た疑問に対する，理の通った考察と言えよう。

内田吟風は，41句目「辺荒与華異」以後を，興平２年に南匈奴左賢王の部落に移ったことを描いていると考える。しかしながら，蔡琰が左賢王の部伍に落ちた経緯が説明されず，唐突であり実際の経験者の詩としては粗雑で,「悲憤詩」が偽作であろうことを想像させる，と説いている。この疑問は，⑶張・⑿譚も呈している。一方，　劉は，40句目と41句に物語の飛躍がある点を捉え，41句目からを別に第二首と考えたわけである。

内田吟風は,まず「悲憤詩」の史料価値を認め,そこに客観的で整合性をもつ事実描写を期待している。だがそれが「悲憤詩」という文学世界の読み方に制限を加えることにもなっているようだ。たとえ時間軸に沿って叙述される叙事的な詩であっても，出来事を逐一説明しているとは限らない。作品を読む際には，何が書かれているかを解読するのみならず，何が書かれていないか，そこにも注意を払うべきではないだろうか。それに関して,後掲㉕余が参照すべき見解を示しており，後述することとしたい。

蔡琰は，結局南匈奴で12年（興平中の拉致から数えるとすれば）過ごし，二子を生み育てた。最後は贖われた結果とはいえ南匈奴から解放された。そうだとすれば，董卓麾下の胡騎とは異なり，南匈奴に対する表現に多少の含みがあっても不思議ではない。仮に内田吟風の言うように，40句目までを李傕・郭汜の胡騎による残虐行為の描出とすると，その後の南匈奴の方は「人俗少義理」と述べる以外，南匈奴に対する否定的言辞は特に窺えない。「悲憤詩」第二首においても，南匈奴の言語・身体・文化が漢と異なる事を述べるが，南匈奴を特に呪詛・批判しているわけではない。

内田吟風はまた，54･55句目「骨肉来迎己，己得自解免」を，贖ってくれた恩人曹操に対する謝意が見られず,蔡琰自身が詠んだ句としては非礼･忘恩的だと説いている。さらに,骨肉の迎えがあったのに，後段で「家人尽」と言っており,「詩的表現とは云え，実際経験者の詩としては，舌足らずの観が強く，この詩が琰の作に非ざることを示唆する」と考察する。

しかし，内田吟風自身，87句目以下「既至家人尽，又復無中外…」に示されるような蔡琰帰郷時の陳留の状況について，建安年間においてもまだ荒廃が続いていたと論じている。したがって「悲憤詩」が，親戚の姿も見えないと慨嘆するのは，故郷陳留の情景描写として考えれば矛盾はないように思う。⑴戴〔⒂李が引用〕は，この点に関し戦乱の実情と十分適合している云々と説く。一方,⒀卞は,「家人」について蔡邕の孫の存在を考証し，詩と史実の矛盾を述べ，逆に⑵余はその孫の存在を否定する論証を行ったことは前述した通り。

内田論文は,「悲憤詩」の叙述に飛躍や言葉足らずのところが見られるというが，そのような作品へのある種の評価と，作品の真偽とは別個の問題ではないだろうか。

内田吟風は蔡琰帰漢の年を，曹操が袁氏との戦いに勝ち，幽并二州を平定し，南単于呼厨泉を完全に服属させた時期であり，南匈奴に没してから12年を数えた建安11年頃であろうと推測する。

最後に内田吟風は，范曄が『後漢書』列女伝に蔡琰の事跡を収録した真意は何かと以下のような問題提起をする。〈范曄は，漢魏革命の社会動乱を経験した人間蔡琰の数奇な運命を評価したのか。六朝貴族社会の道徳思想を反映しているのか。夫のためには主権者に対しても自己主張を行う女子の気概を認めたのか。中国思想史上，興味のある課題だ。〉『後漢書』という史料テクストの中の蔡琰と「悲憤詩」を捉える新たな視点として，内田吟風の問題提起には留意をすべきだろう。

⒅　周芝成「蔡琰被虜年代考弁」（『上海師範学院学報』社会科学，1983-１，1983）

蔡琰，初平３年拉致説を否定,『後漢書』の云う興平２年説を主張。周芝成は論拠の第一点に,『後漢書』董祀妻伝の,「操因問曰,『聞夫人家，先多墳籍，猶能憶識之不。』文姫曰,『昔亡父賜書四千許巻，流離塗炭，罔有存者。今所誦憶，裁四百余篇耳。』」という記載を挙げる。周芝成は，この記

述から，蔡邕が娘蔡琰に「墳籍」を残し伝えたはずだと述べる。そして，蔡琰が『漢書』の修改を素志とし，初平３年の董卓誅滅によって下獄した時も，「継成漢史」の願望を王允に伝えており[41]，その作業に必要な「墳籍」は，身に携えていたはずで，蔡邕が死を覚悟した時に，娘に「墳籍」を託したのだろう。したがって，そのことは，蔡琰がその時まだ羌胡に掠われていなかったことの証明になる ―― と説く。

つまり，周芝成は，李傕・郭祀等が陳留を掠殺したのは初平３年１月，蔡琰が下獄したのが初平３年４月の事で，蔡琰が四千余巻の書籍を父から受け継いだのはその後のことになるから，蔡琰が初平３年１月に拉致されるということはあり得ない，というわけである。

しかし，蔡琰の素志は「継成漢史」であったから，「亡父賜書四千余巻」が長安に存在したと考えるのは，飛躍がある。董卓の乱前後の混乱を考えれば，蔡琰が多量の書籍を携えず，それらを陳留等の長安以外の地に残していた可能性も十分考えられよう。周芝成はまた，『三国志』王粲伝に，蔡琰が年少の王粲に異才を見いだし，所有する書籍をすべて王粲に将来譲ろうと述べた記載を取りあげる。そして，その願望が果たせずに，代わりに娘に書籍を伝えたと言うが，この史料の取りあげ方は牽強付会であろう。

周芝成は，蔡琰の初婚年齢に関して，蔡邕が光和元年に出した上表文[42]に，「臣年四十有六，孤特一身」とあることから，蔡琰の生年は，光和元年以後であること，さらに，丁廙の「蔡伯喈女賦」に「在華年之二八」とある記述から，蔡琰が衛仲道に嫁いだのは16才で，初平４年以後のことであるから，それ以前の拉致というのはあり得ないと述べる。この点については，後掲⒆鄭が，「孤特一身」の後に「前無立男，得以尽節王室」とあるから，この部分は息子のいないことを言っているのであって，娘がいないとは述べていないと据えるのが妥当な見解であろう。

周芝成は，「悲憤詩」冒頭の記述（董卓麾下の胡騎による拉致）よりも，『後漢書』董祀妻伝に興平２年拉致とある記載を信ずべきで，「悲憤詩」を蔡琰の真作とするには問題が残ると結ぶ。

⒆　鄭文「蔡文姫没于胡中論略」（『蘭州大学学報』社会科学版，1983-1，1983）

鄭文は，李傕・郭祀等によって，初平３年春，陳留において拉致され，興平２年の11・12月に南匈奴右賢王の部伍中に没し，河東平陽に住したと説くのは，⑴戴・⑵余と同様である。鄭文は五言の「悲憤詩」を蔡琰の真作ととり，騒体については触れない。

『後漢書』董祀妻伝に，最初の夫・衛仲道の死後，家に「帰寧」したと記されることについて，鄭文は，蔡琰が帰ったのは，父のいる長安や洛陽ではなく，故郷陳留であると説く。中平末年から初平はじめの洛陽・長安の荒廃を考えれば，蔡琰はあえて家族を同行させなかったであろうというのがその論拠である。

『後漢書』董祀妻伝に，興平中に「為胡騎所獲，没于左賢王」とある記載と，「悲憤詩」に董卓の部下に掠われたと述べる矛盾に対する，鄭文の考証は，戴・余説とほぼ同じ史料による。興平２年に南匈奴に移された場所というのは，河東の平陽であるという説も，⑵余と同じである。しかし鄭文は，先行する⑴・⑵に関して何ら言及していない。

ただ，蔡琰の居住地について，鄭文は，⑵余より更に多くの史料を挙げて，客観性の高い考察を進めている。また，後漢末に鮮卑が南匈奴を圧迫していた情勢にも触れる。

⒀卞は，蔡琰の連行された先は河東平陽であるが，詩中の情景はその地方のものと矛盾するという疑問を提示した。これついては，鄭文は，河東平陽は黄河以北にあり，蔡琰が生まれ育ったのは黄河以南でその間の距離は二千里ほどある。異境に身を置いた蔡琰には，平陽の地が霜雪が多く北風も強いと感じられたのだろうと述べる。

鄭文は，文芸作品は歴史記述と異なり，修辞や誇張を免れないと言い，「悲憤詩」に史実との符合を見る際にも，配慮が必要であると指摘している

が,傾聴に値しよう。鄭文の考究は,南匈奴の動向・居留地に関する実証的考察等，史料が豊富で説得力がある。

⑳　陳祖美「蔡琰生年考証補苴 ― 兼述其作品的真偽及評価中的問題」(『中華文史論叢』1983-2，1983)

はじめに蔡琰の生年について考証。関連して，蔡琰が光和元年に出した上表文に,「臣年四十有六,孤特一身」の解釈を，蔡琰に，娘ではなく息子がいなかったことを示していると説くのは，前述⑲鄭と同様である。

文章の後半の趣旨は，後掲㉑陳とほぼ同じ。

陳祖美は，最後に真偽の問題は作品自体の価値とは無関係であると述べ，作品を史料から切り離して評価すべきと主張する。これは，従来見られない観点で注目してよいと思う。しかし，そのような問題提起に対し，陳祖美の論考で用いられる「現実主義」「浪漫主義」「叙事詩」「叙情詩」といった旧来の枠組みで答えることには，限界があるように思う。

蔡琰の生年考証・晩年の事跡については，熊任望「蔡文姫的生年」(『河北大学学報』〈哲学社会科学〉 1980-3，1980)・陳仲奇「蔡琰晩年事迹献疑」(『文学遺産』 1984-4，1984)・劉開揚「関于蔡琰的生年」(『中華文史論叢』1984-4，1984)等がある。ただし,「悲憤詩」を理解する上で参照すべき言及は特にない。

㉑　陳祖美「漢末女詩人蔡琰」(『文史知識』1983-4，1983)

見出しに「人物春秋」とあるように，蔡琰の事跡を紹介した啓蒙的文章と思われ，論証自体は少ない。陳祖美は，蔡琰の拉致を興平年間のこととし，左賢王の妻となったと記している。左賢王に嫁したという見方は，⑵余が，左賢王の部下と結婚したと見なすのと異なる。『蔡琰別伝』に示される左賢王の部下に嫁したという記載や，『後漢書』董祀妻に言う「没於南匈奴左賢王」の解釈についての論究は従前ほとんどない。郭沫若はじめ，左賢王に嫁したという見方は，暗黙の了解であろうか。この点は,「蔡琰」の受容のあり方とも関連するように思う。蔡琰＝南匈奴の王妃という読み取りの方が,蔡琰伝承としては物語性が高まる[43]。だとすれば，現代の読者も「悲憤詩」の誤読に，無意識に加担するおそれはないだろうか。

陳祖美は，蔡琰帰漢の年は，建安12・13年の両方の可能性があるが，曹操が，丞相となった建安13年の可能性が大きいとも説いている。曹操が統治者の地位を確立して後，文治を進める政策の中で，有名な文人蔡琰の娘を贖い戻したのであろうという推察である。

「悲憤詩」の真偽について,現今の「文学史界」は,五言体の方を真とし，騒体を晋代の偽作としていると述べる。しかしながら，騒体を偽作と見る根拠もしくは考察は，他にそれほど多く見られない。

⑵余が，騒体「悲憤詩」の描く塞外の情景が,史実と合わないと説き，⑷郭が，作品水準の低さから別人の偽作だろうと推測する以上の論究は従来なされていない。とくに後者は，印象批評に過ぎまい。祖美陳の言う「文学史界」は曖昧な言い方だが,それが何を根拠として,騒体偽作論をとっているのか不明である[44]。

陳祖美は，一般的に，晋人の偽作と見なされる騒体の「悲憤詩」に対する芸術性の評価は否定的だが，そのような見方は正しいと断ずる。そして,五言の「悲憤詩」は，蔡琰自身の制作による現実主義的叙事作品で，建安の諸作家を凌駕する傑作であると評価する。

ただし，作品の具体的分析は十分になされていない。

㉒　蔡義江「史載蔡琰《悲憤詩》是晋宋人的偽作」(『北方論叢』1983-6，1983)

蔡義江は，現時,「胡笳十八拍」と騒体の「悲憤詩」はおおむね偽作とし，五言の「悲憤詩」を真作と見るのが大多数を占めると総括。しかしながら,唯一真作と一般的に見なされる五言「悲憤詩」について，これを晋宋間の佚名文人の偽作ととる立場を展開する。

蔡義江は，基本的に，蘇軾による偽作説に依拠

する。蔡琰の本事に関し,『後漢書』の本伝では興平２年と言っているのと「悲憤詩」の描写との矛盾についても，蘇軾の論法をそのまま踏襲する。ただ，蔡義江は，新たな観点からも偽作説の論拠を提出している。

まず蔡義江は,「悲憤詩」の冒頭,「漢季失権柄, 董卓乱天常」の「漢季」とは漢末のことで，漢朝崩壊以前に，このような言い方はできないと主張する。そして，たとえもし,「悲憤詩」が郭沫若の説くように曹魏時代の作だと仮定しても，それは次のような理由から成立しないと述べる。〈もし蔡琰が, 魏朝樹立後に「悲憤詩」を制作したとしても, 曹丕即位後すぐに情勢に追随して，漢末がどうこうとは言えない。「悲憤詩」の冒頭は，漢魏の王朝交代後かなり時間がたってからの語り口であろう。だとすれば，蔡琰がかなり年齢を重ねた後の制作であるはずだが,「悲憤詩」では「託命於新人，竭心自勗厲」となっていて表現が不自然だ。〉

しかし蔡義江のこのような推論は，論拠が不十分であり説得力を欠いている。では，後漢末の作品だと考えた時に，蔡義江の主張する「漢季」という語と矛盾するのかどうか。それに対して私見を言えば，陳琳「武軍賦」に,「漢季世之不辟，青龍紀乎大荒」[45]という用例を反証としてあげることができる。陳琳は建安中に没しているから，その作品は漢代のものであることが明らかである。したがって「漢季」という言葉によって,「悲憤詩」を, 漢魏禅譲後の制作と判断することはできない。(1)

戴は，蔡義江とは逆に「悲憤詩」に「漢季」とあるのは，曹操の勢力がすでに確立していたことを示していると論じている。「悲憤詩」の制作時期を仮に蔡琰帰漢後の建安年間と考えても，実質的に漢朝が崩壊しつつあった時期であるから,「漢季」という言葉の使用は可能であったと考えられる。

蔡義江は,「悲憤詩」を「其筆勢乃效建安七子者, 非東漢詩也」と評した蘇軾の説を引き，具体例をあげる。たとえば曹操の「薤露行」「蒿里行」と「悲憤詩」を比較し,「賊臣持国柄，殺主滅宇京」が,「漢季失権柄，董卓乱天常」に,「関東有義士, 挙兵討群凶」が,「海内興義士，欲共討不祥」という具合に,「悲憤詩」が曹操作品を模擬していると説く。蔡義江は，他にも「悲憤詩」に，曹植詩を踏まえかつ，より精錬された類似句があると例示する。

しかしながら,「悲憤詩」は，建安の詩句と類似の句があるから，蘇軾が述べるように，建安詩をまねたのだと考えるのは，速断にすぎ客観性を欠く。蘇軾の「悲憤詩」偽作説は，要は,「悲憤詩」の建安文学における突出性に疑問を投げかけたものに他ならない。しかし「悲憤詩」に限らず，同時代から卓越した文学作品の存在が，往々にして見られることもまた事実であろう。

「悲憤詩」の文学史的位置づけに関して,「悲憤詩」とその周辺の詩句との影響関係を少し探り，私見を加えたい。『文選』の李善注には,「蔡邕女琰詩」「蔡琰詩」として,「悲憤詩」の詩句が15例引用される[46]。李善は, 作品に用いられている言語表現の典拠・用例を，必ず先行作品から引用している。今，李善が「悲憤詩」をどの時代のものと見ていたか，具体的に探ってみよう。たとえば,『文選』巻20所収の，曹植「応詔詩」「弭節長鶩, 指日遄征」の部分の李善注は,「蔡琰詩曰，遄征日遐邁」[47]となっている。「遄征」という語は,『文選』巻二十，潘岳「間中詩」でも「命彼上谷，指日遄征」と用いられ，その李善注は,「曹植応詔詩曰, 指日遄征」[48]と引いている。さらに『文選』巻五十九，沈約「斉故安陸昭王碑文」に「於是駆馬原隰, 巻甲遄征」とあるが，その李善注は「曹植詩曰, 指日遄征」[49]と述べている。したがって，あくまでも李善の判断であるが,「遄征」という詩語から, 蔡琰→曹植→潘岳・沈約という継承関係が窺える。李善は,「悲憤詩」を「蔡琰詩」と称しており，その注釈姿勢を考え合わせると，蔡琰を曹植に先行する詩人と位置づけていると言えよう。このような李善の認識・判断は，必ずしも絶対とは言えないが,「悲憤詩」の真偽・文学史的位置を考える上で参照する価値があろう。

蔡義江は,「悲憤詩」を，晋宋間に盛んになった

偽作の風気がもたらしたものと結論づけている。そして『詩品』『文心彫龍』に蔡琰の名が見えず，『文選』『玉台新詠』に彼女の作品が選録されないことに論究する。蔡義江は，李陵・蘇武や班婕妤等の詩があえて偽作と否定されていないのと異なり，時代の近い晋宋の偽作であれば，言語の格調等から容易にそれと判断されたのだと推測する。蔡義江のこうした推論は一つの考え方にすぎないが，確かに「悲憤詩」および蔡琰は，六朝時代においてあまり注目された形跡がない。⒀卞が示したのと同様の疑問である。

⒇　丁夫「有関蔡文姫生平的幾箇問題 ― 兼談曹操贖回蔡文姫的原因」(『内蒙古大学学報』哲学社会科学版，1984-4，1984)

⑷郭は，蔡琰は興平２年に拉致され，左賢王の王妃となったが，曹操は，文化的な観点から彼女を贖い戻したと説いている。それに対する否定論。

丁夫は蔡琰拉致の時期・場所に関する従前の論議を踏まえていないと見え，新しい観点は特に示していない。丁夫の独自な考察も見られるが，いずれも論拠が希薄である。丁夫は，蔡琰は，初平３年に董卓の将兵である羌人に拉致されて後，興平２年に人身売買によって羌人から南匈奴の手に渡ったと説くが，興平２年の史実との関わりが説明されていない。また，曹操が南匈奴から蔡琰を贖い戻した理由を，蔡琰の知名度を利用し，自己宣伝のためその娘を帰漢させたという，政治的意図から説明する。丁夫は，そのような推論の前提に「曹操是以残暴和譎詐著称的」と述べるが，客観性が求められる論文としては不適切であろう。

四

前掲⒇陳は，作品を史料や真偽の問題から切り離して評価すべき点に触れていたが，「悲憤詩」を作品テクストとしてどう分析するかという具体的模索は，1990年代以後ようやく始まったと言ってよい。

㉔　黄嫣梨『漢代婦女文学五家研究』第６章「蔡琰」(河南大学出版社，1993)

はじめに，従前の研究を紹介しながら蔡琰の経歴を述べるが，特に筆者の新しい知見は示されていない。しかし，先行研究は，前掲の諸論考に比べ丁寧に踏まえられている。

「悲憤詩」に関して，黄嫣梨は，蔡琰作とされる三首は自伝体の作品といえる。特に，第一首は，中国詩史上，文人が創作した初めての自伝体による五言長編詩である ―― と説いている。筆者の言うように自伝体であれば，史実とのある程度の整合性が要求されるし，そこから「悲憤詩」の真偽問題も探求できるように思う。

黄嫣梨は，蔡琰の配偶について，南匈奴左賢王の妻となったことを記す。㉑陳と同様である。㉒余との蔡琰の事跡に関する見方の若干の相違は，「悲憤詩」の理解に懸隔を生じさせることになろう。

また，五言体の方は帰国後の状況を描写し，騒体より内容が増益しているから，漢地帰国後の作だとする推測は，⒃岡村と似ているが，あまり説得力がない。

蘇軾・⒀卞等々従来の学説が，「感時念父母」の一句にとらわれて，蔡邕の死後このような慨嘆をもらすのは矛盾だと主張したことに対し，黄嫣梨は，こう述べる。〈蔡琰は時に感じて，父母を追念しているのであって，何かの時に触れて，故人を追憶することはよくある。『史記』屈原列伝[50]に「天は人の始め，父母は人の本。困苦が極まれば天に呼びかけ，痛み極まれば父母に呼びかけるのが常だ。」と言うのは，人情である。まさか，父母が死んだら，もう恋しがったり，声をあげて呼びかけたりできないというのでもあるまい。いわんや，文芸創作は歴史実録とは異なる。五言体の悲憤詩は，叙事詩だが詰まるところ文芸作品だ。言葉の配列上，「母親を念う」「家人を念う」より「父母を念う」の方がよい。〉

以上，黄嫣梨の意見は正鵠を射ているように思う。このような立場から，黄は，「悠悠三千里」の解釈についても，従前の研究者が，地理的な距離と合うのかどうか穿鑿してきたことに対して，必

ずしも実際の距離を示すのではなく,「三千里」は距離の大きさを表す文学言語であると，例を挙げて考察している。

黄嫣梨は,「悲憤詩」は，叙事と抒情の緊密な結合が見られる。とりわけ五言詩は文人抒情詩の作法を消化し，また楽府の叙事詩にならっている。中国詩歌史上,「悲憤詩」と「焦仲卿妻」は叙事詩の双璧である ―― と述べる。また「悲憤詩」が二首とも，愛子と棄子の矛盾を描く点にも注目する。「感時念父母」という句を含めて,「悲憤詩」に通底する骨肉の情が，中国文学史上どのように表現されてきたか。それも「悲憤詩」をめぐる一つの新たな課題になろう。

㉕　余志海「蔡琰五言《悲憤詩》的情感透視」（『陝西師大学報』24-1，1995）

余志海は，五言の「悲憤詩」を蔡琰の作と見なす前提の上に，作品論を展開。「悲憤詩」における感情と創作の関係を分析する。

余志海は，詩人は，言い尽くしがたい痛苦の感情をもつ場合，作品中にそれを表現しないことがあると述べている。そしてたとえば，蔡琰が左賢王に嫁ぐ際の状況は説明されず,「人俗少義理」という一句を述べるのみであると指摘している。参考にすべき意見だろう。ただし余志海も，蔡琰が南匈奴において再嫁したのは左賢王と述べている。既述したように,『蔡琰別伝』の言う左賢王の部下に嫁した可能性が，検討されるままに誤読を重ねていると言えまいか。

㉖　冨谷至『ゴビに生きた男たち ― 李陵と蘇武』（白帝社，1994）

「悲憤詩」についての論著ではないが，注意を引く言及が，同書の「黄昏そして西域慕情」という章にある。

冨谷至は,『文選』巻41，李少卿の「答蘇武書」[50]を南朝宋の偽作とする論究の中で,「西域胡地を題材にした叙情詩，及び詩語が，東晋から宋にかけての間に結実していったと考えたい」とし，その際,「悲憤詩」も史料として用いられたと述べる。冨谷至は，蘇軾以来の「悲憤詩」偽作説に左袒すると言い，范曄『後漢書』は，南朝にできあがっていた偽作の「悲憤詩」を蔡琰の列伝に配置したのではないかと推測している。ただし,「悲憤詩」を偽作とする根拠について，蘇軾の説に触れる以外何も示していない。

しかしながら，仮に「悲憤詩」を後人の偽作と考えた場合，⑯岡村でも触れたが，それを生み出す晋宋前後の文学因襲・文学環境を考察すべきだと思う。その意味では，冨谷至が,「悲憤詩」の形成を，西域胡地をめぐる詩的世界の発展と広く関連させて論じるのは，示唆的であると考える。

㉗　川合康三『中国の自伝文学』(創文社, 1996)

中国の自伝文学を，西欧との対比を含め幅広い射程から論じた同書中「Ⅴ 詩の中の自伝」に,「悲憤詩」が取り上げられる。川合康三は,「悲憤詩」二首の真偽に，今日も定説がないとし，作者が誰かという問題よりも，作品そのものがどのような性格を有するのかという点から「悲憤詩」の見直しを試みる。このような観点は，㉔黄・㉕余が，一応「悲憤詩」を蔡琰作と見なした上で作品論に及ぶ立場とも異なっている。

川合康三は，詩が「古典文学ではすぐれて様式化されていたもの」であることを確認する。そのことを踏まえた上で,「悲憤詩」が「自伝」と見なしうるのかという問題提起をしている。さらに，この作品は，蔡琰の悲劇的人生を劇的・物語的に語っているが，それは女性が自立しえない時代に被る様々な不幸というものを，蔡琰という具体的な女性の典型的人生によって語ったものだと指摘。そして,「悲憤詩」は自伝性よりも物語性が濃厚であり,「語り手の感情はあまりにも類型化していて，個としての性格が乏しい」と述べる。

川合康三の一つの結論は,「悲憤詩」は作者の問題と切り離して,「蔡琰という実在の女性，その悲劇的人生を素材として組み立てられた物語詩，そう捉えるのが最も自然で無理がない」というものである。このように，川合康三の論究は，真偽論を前提とした旧来の「悲憤詩」研究の常套を乗り越える画期性をもっている。「自伝」という新たな

枠組みによりつつ，中国文学の大きな因襲の流れの中に作品を把捉する川合康三の試みは啓発的と言えよう。

川合康三は，同書の末尾で「典型への志向が強い中国では，差異化より類型化が有力に働き，自分という人間も類型の枠の中で認識しようとする」と述べている。個性にまして典型化・類型化の著しい建安詩や楽府詩の因襲の中で「悲憤詩」を見たとき，蔡琰の人生とそれを描く詩的世界との間にはある一定の距離を置くべきであろう。

しかしながら，たとえ女性が経験するあまたの不幸の典型として蔡琰の人生が描かれているとしても，後漢末の政治社会状況や南匈奴の動向を具体的に把握すること，それによって，「悲憤詩」の理解をはかってきた従来の研究はなお意義をもっている。史伝と作品の関係をどう見るかは基本的課題であるが，「悲憤詩」の描く人生の曲折に満ちた世界は，後漢末時代の具体的史実の中に浮き彫りにされることもまた事実であろう。

五

冒頭で述べたように，「悲憤詩」の理解には定論がなく，真偽論と作品自体の捉え方の関係も複雑に絡み合っている。浅識を顧みず，従来の論考に逐一検討を試みた所以である。1950年代以後本格化した，真偽論を含む「悲憤詩」の論究は，必ずしも先行研究の批判的継承の上に発展してきたとは言い難い。そのように跛行的な研究の状況は，1990年代に入り，旧来の考察の見直しや，テクストに内在する文学性等の探求へと進展を見せ始めた。新たな研究の展望は今後に待つとして，「悲憤詩」の基本的理解について従来の論究をふまえ，最後にあえて私見を述べたい。

「悲憤詩」の真偽論は，偽作とするものの根拠は総じて薄い。真作と論じる中では，⑴戴・⑵余・⑻劉・⒂李・⒆鄭等の論証が妥当性をもつように思われる。特に⑵余と，それを踏まえたと考えられる⒆鄭は，「悲憤詩」を理解する基本資料[52]と言うべきであろう。その理由および他の論考との比較は，間々既述した通りである。偽作と結論した⒄内田も，論証自体は堅実で，むしろ「悲憤詩」に後漢末・南匈奴史を窺う史料としての価値を認めている。同時代もしくは近接する時代の受容者・読者であれば容易に了解するであろう，後漢末の政治社会状況の中でもたらされた事件や悲劇的な体験が，「悲憤詩」に詠み込まれているとすれば，そこに作者の別と関わりなく歴史の真実が浮かび上がってこよう。真作論に立ちかつ論証が妥当と思われる上記の論考も，曲折のある後漢末の歴史背景を詳細に把握していると言える。

大要まとめれば，蔡琰は初平３年に陳留において，「東下」した董卓麾下の李傕・郭汜の軍により拉致され，「西の関に入り」長安に向かった。転じて興平２年に南匈奴左（あるいは右）賢王の部伍の手に渡り，「華と異なる」異境の地，南匈奴の河東平陽に入った。その後，部伍中の者と婚姻し二子をもうける。興平２年から12年を経た建安11・12年頃，曹操により贖い戻され漢地に戻り，更に「命を新人に託」して再婚した。その翻弄される境遇を作品に結晶させたのが五言体の「悲憤詩」であろう。騒体はその体験の中から南匈奴での生活と子との別れをテーマに詠じている。

⑵余が示すような（実際の地理と詩的空間に齟齬を見る）騒体偽作論[53]について言えば，文学史の通説となっているが，そのことの検証は十分にされていない。⒆鄭・㉔黄が明快に指摘しているように，「悲憤詩」は歴史記述と異なる文学言語であり，修辞や誇張を免れないこと，特に，叙事的な五言体と異なり騒体の「悲憤詩」は抒情性が濃い様式であることに注意すべきであろう。

ただし，「悲憤詩」を蔡琰の作と認めるならば，創作者としての女性の位置づけを含め，それを後漢末・建安時代の文学史に組み込み直す作業が必要である[54]。また偽作論を主張する場合は，前述したように，そのような偽作をもたらす晋宋の文学因襲まで見渡すべきであろう。

さらに「悲憤詩」及び「蔡琰」がどう受容され

たかを究明していくことも今後の課題である。他日の考察に期したい。「胡笳十八拍」はその中で理解しうるものと考えている。

拙稿は，不学ゆえの遺漏や参照の及ばなかった論究もあると思う。ご批正を仰ぎたい。

註

⑴　創作者としての「女性」の文学史的位置づけや，「悲憤詩」における女性性の問題は，拙稿①「後漢末・建安文学の形成と『女性』」（『山形大学紀要<人文科学>』15-４，2005）・②「建安の『寡婦賦』について ― 無名婦人の創作と詩壇 ― 」（『山形大学人文学部研究年報』２，2005）でふれた。

⑵　『後漢書』(中華書局, 1965)列女伝, 2800～2803頁。注３以下の出典は,紙幅の都合上所在のみ示し,同一資料の重出は避ける。

⑶　論文の検索は,『東洋学文献類目』（人文科学研究協会，～2004）・『三国志研究要覧』（新人物往来社，1996）・『日本中国学会報』彙報（～2004）を参照。

⑷　宋，胡仔『苕渓漁隠叢話』（『四庫全書』〈上海古籍出版社，1987〉集部，詩文評所収）前集巻１，1480-49頁。

⑸　『苕渓漁隠叢話』（『四庫全書』集部，詩文評所収）前集巻１，1480-49・50頁。

⑹　『後漢書集解』（中華書局，1981）巻84所引。14葉右。

⑺　『後漢書』南匈奴伝，2965頁。

⑻　『三国志』魏書，武帝紀，９頁。

⑼　『後漢書』董卓伝，2322頁。

⑽　『四庫全書』子部，雑家類所収，860-324頁

⑾　『後漢書』董卓伝，2332頁。

⑿　『後漢書』董卓伝，2333頁。

⒀　『後漢書』献帝紀，の記載によったと思われる。378頁。

⒁　『後漢書』献帝紀，371頁。

⒂　『後漢書』朱儁伝，2312頁。

⒃　『資治通鑑』（中華書局，1956）によれば，陳留県が李傕・郭汜によって殺掠されたのは初平３年正月。1931頁。

⒄　余冠英が用いたテクストは「仇池筆記」（『四庫全書』子部，雑家類所収）偽作，863-７頁。

⒅　胡応麟『詩薮』（中華書局，1959）外篇巻１，129頁。

⒆　未見。⑵余冠英，78頁所引。

⒇　鄭振鐸『挿図本中国文学史』（人民文学出版社，1957）111・112頁。

㉑　『後漢書集解』（中華書局，1981）巻84，14葉右・左。

㉒　ただし，『後漢書』南匈奴伝は，建安元年，『後漢紀』（中華書局,）献帝紀は，興平２年12月のこととする。543・544頁。

㉓　『後漢書』董卓伝，2340頁。

㉔　『後漢書』南匈奴伝，2966頁。

㉕　『尚書古文疏証』（『四庫全書』経部，書類所収）巻５下, 66-270頁 。余冠英は巻50下とするが誤り。

㉖　『世説新語校箋』（中華書局，1984）444頁。

㉗　『晋書』（中華書局，1974）羊祜伝，1013頁。

㉘　『晋書』蔡豹伝，2111頁。

㉙　『後漢紀』（中華書局，2002）献帝紀，536～539頁。

㉚　『三国志』魏書，王粲伝，597頁。

㉛　『中国文学報』13，1960。

㉜　『藝文類聚』（中文出版社，1980）巻30，人部14「怨」，542頁。

㉝　『資治通鑑』1978頁。

㉞　『晋書』載記，劉元海伝，2644・2645頁。

㉟　内田吟風「魏晋時代の五部匈奴」（『北アジア史研究 匈奴篇』〈同朋舎, 1975〉所収）は，建安17年頃より曹魏政権が, 南匈奴全体に影響力を及ぼしつつあったことを，曹操が陳琳に欠かせた檄文「檄呉将校部曲文」（『文選』巻44）や，『三国志』魏書，梁習伝の記載から推測している。

㊱　『楽府詩集』（中華書局，1979）巻59,「胡笳十八拍」解題所引，860頁。

(37) (1)戴君仁論文，２頁。

(38) 『中国歴史地図集』（地図出版社，1982）第２冊，42・43頁。

(39) 作品や文学史の考察をする場合，男女の性差（＝作家が男性か女性か）に関わりなく「女性性」というものが存在することにも注意すべきことを，注１，拙稿①でふれた。

(40) 注35前掲書，271頁参照。

(41) 『後漢書』蔡邕伝，2006頁。

(42) 『後漢書』蔡邕伝，2002頁。

(43) 郭沫若の戯曲「蔡文姫」（『郭沫若選集』〈人民文学出版社，1982〉第８巻所収）・顧銘新『蔡文姫全伝』（長春出版社，1977）では，蔡琰を左賢王の王妃としている。

(44) 文学史書の中では，管雄『魏晋南北朝文学史論』（南京大学出版社，1998）・中国社会科学院文学研究所，徐公持編著『魏晋文学史』（人民文学出版社，1999）が，「悲憤詩」の真偽論とそのあらましまで言及し，安易な「通説」に終わっていない。

(45) 『藝文類聚』巻59，武部「戦伐」，1070頁。

(46) 富永一登『文選李善注引書索引』（研文出版，1996）参照。そのうち五言体の句が７割，騒体の方が３割ほどを占め，「胡笳十八拍」の句は引用されていない。『文選』李善注を見る限りの推測であるが，「胡笳十八拍」は六朝期のものからはかけ離れた文学言語であったか。そもそも李善は「胡笳十八拍」を偽作と見なしていたか，あるいは李善注成立時に「胡笳十八拍」は存在していなかったか。いずれかの可能性が考えられる。

(47) ７葉左。『文選』巻43，趙至「与嵇茂斉書」にある，「朝露啓暉，則身疲於遄征」という句にも，同じ「蔡琰詩」の引用がなされる。15葉右。

(48) 10葉右。

(49) 23葉右。

(50) 『史紀』（中華書局，1959）屈原伝，248頁。

(51) １葉左～７葉右。

(52) 両者の「悲憤詩」の解釈は，以下の注釈書に反映されている。余冠英『漢魏六朝詩選』（三聯書店，1993） 20～24頁。鄭文『漢詩選箋』（上海古籍出版社，1986）145～153頁。

(53) (19)鄭はふれないが，注52の注釈書では偽作と疑っている。

(54) 注１拙稿②で，建安文学における丁廙の妻という無名婦人の創作についてふれた。

《悲愤诗》小考

― 研究史和争论点 ―

福　山　泰　男

（文化システム専攻アジア文化領域担当）

《后汉书》列女传·董祀妻传即蔡琰（字文姬）传，被称做《悲愤诗》的诗二首被收录。蔡琰是后汉代表学者蔡邕的女儿，在后汉末的动乱中她作为一名留下坎坷经历的女性而被人们熟知。在《悲愤诗》中，她戏剧性人生的一部分被咏叹，但关于作者自古以来有多种争论。

除《悲愤诗》二种以外，相传为蔡琰的作品有《胡茄十八拍》。但是，《胡茄十八拍》是在北宋末年郭茂倩的《乐府诗集》中才初次出现的作品，和范晔的《后汉书》所收录《悲愤诗》底本的性质相异，所以对于这两件作品的研究方法，程序自然不同。我想姑且将作为底本的《悲愤诗》和《胡茄十八拍》分开来进行思考。关于《胡茄十八拍》，围绕作品的真伪问题，1959年在中国对《胡茄十八拍》进行过很大的争论。其中，对《悲愤诗》相关的重要研究也被开展。这些也包括《悲愤诗》历来较多的被广泛讨论过的，但各个解释，论点，评价，批评方法等尚有值得商榷之处的研究。

并且，把《悲愤诗》置于怎样的文学史的地位，《后汉书》列女传被收录了的历史，思想的意义，或者作品内在的女性问题等课题，很多被遗留下来。

为了完成此类新课题，暂且有必要对《悲愤诗》以前的各种理解进行纵览。敝稿对以前所发表的30篇左右有关《悲愤诗》的论文进行了探究，就此争论点阐明一下个人见解。

1950年以后对《悲愤诗》的研究变得正规化了，但包括真伪论在内的广泛讨论，未必能说在对先前研究批判继承的基础上得到了发展。如此失调的研究状况，在进入1990年以后，才对以前的研究重新认识和底本内在文学性等探究得到了发展。

把《悲愤诗》作为基应该怎样理解？并且对新的研究如何展望？敝稿在最后将阐明若干个人见解。